

[13_01]九州大学大型計算機センター広報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1474872>

出版情報：九州大学大型計算機センター広報. 13 (1), 1980-03-10. 九州大学大型計算機センター
バージョン：
権利関係：



リモートステーション事始め

加藤 清史*

この原稿を依頼されて、何を書こうかと、しばらく迷ったが、「九大センターと九工大に関することを書いてほしい」という注文がついていたので、特に九工大リモートステーション開設当時のことを思い出しながら書いてみようと思う。

九工大の計算機室には、昭和38年度に設置されたOKITAC-5090Cがあり、技官1人、パンチャー1人で運営されていた。このシステムはコアメモリーを商用小形機に採用したのものとしては極く初期のもので、十進12ケタノ語で、命令語は一語に二命令入るものだった。予算の都合で、入力紙テープ、したがってパンチャーといってもカードパンチではないのでプログラムのミス指摘しながら紙テープを作って行く非能率的なことをやっていた。主な使用言語はALGOLIPであった。当時、九大の中央計数施設にはOKITAC-5090H形という高速に改良されたものが入っていたので、御存知の方も多と思う。C形はメモリーが4KWしかなく、補助記憶としてMTがあるにはあったが、MTを使うJOBは時間がかかるので特殊JOB扱いをしていたと思う。教官側のスタッフは、当初ははっきり決めておらず、予算審議等は計算機委員会で行っていたが、運営は、計算機室が制御工学科の建物に隣接していたところから、制御工学科の教室主任が世話をする慣行ができていった。

このように学内の計算機が小さいので、共同利用の大型計算機センターに対する期待は大きく、東大センターが出来たとき、いち早く連絡所を開設し、当時制御工学科に着任して間もない私が連絡所責任者として御世話することになった。一時私が九工大を留守にした間は、吉田将先生（現九大）に交代していただいたが、その後またお引き受けすることになり、現在に到っている。この間に、東大センターに次いで設置が認められた、九大センターの工事中の建物への米軍機墜落事件があり、九大関係者の御苦労は大変なことだったが、私にも、署名のとりまとめなどのほか、学長の名代として長崎大学の当時の工学部長、栗原道徳先生などと御一緒に、文部省へ早期移動開始を陳情に行った思い出もある。

九大センターが軌道に乗り始めた頃、九工大の5090Cはそろそろ寿命が近付いていた。障害発生が頻繁になり、稼働率が下って来た。そこで急増する計算機需要は九大センターに殺到することになった。距離的に近いこともあって、出張利用（正規のもの以外に交通費自弁組を含めて）が盛で、その頃は、九大センターの滞在者控室へ行けば九工大関係者を誰かつかまえることができるほどだった。

学内に計算機室長という職制ができ、関連規則が整備されはじめたのはこの頃で、初代室長には、吉田将先生がなされた。

大学としては当然、文部省に計算機の更新をお願いした。工学系の単科大学として計算機需要の多い特殊性を主張して、中形機で更新してもらえよう度々お願いしたが、文部省は、大学の規模から言って小形機（買い取り価格3300万円）しか認められないという。

九大センターの利用状況などのデータを動員して、中形以上が必要であることを力説したのが奏功し、小形機更新に九大センターのデータステーションとして1200万円を上積みして47年度に予算化された。これには、当時の吉田室長の粘り強い御努力もさることながら、2400 bits/secのデータステーション開設という全国の大

* 九州工業大学工学部情報工学科 助教授，連絡所責任者

型計算機センターでも初めての試みに踏み切ってまで御支援下さった九大センターのバックアップが大きき物を言ったことである。

予算の内容は上述のようであるが、契約の内容は小形計算機とデータステーション一括でよしいとのことだったので、メーカー各社の提案を聞き、九工大でのローカル処理機能とデータステーションとしての機能とのバランス、リモートステーション受注の実績などが考慮され、通信制御プロセッサとして、OKITAC-4300を併ったOKITAC4500システムが選定された。

それからは、九大センターと九工大にメーカーの富士通、沖電気を交えた打合せが度重ねられ、48年4月からの正式運用を目指して作業が進められた。いまでこそ、データ伝送システム、オンラインリアルタイムシステムは珍しくないが、当時は大型センターのリモートステーションも数えるほどしか無く、まして2400 bits/secはじめてだったので、データ伝送手順の確認からはじめなければならなかった。

九工大としては、オンラインでの結合を希望したが、いろいろの事情から、当初は磁気テープを仲介とする一括処理で出発することになった。九大センターと九工大の間のみでも運用の詳細、すなわち、取扱うJOB種別や、運用時間帯、運用開始の手続き、障害時の処置、更には料金に関する事など打合せを重ねる必要があった。吉田室長の外遊があり、私が途中から室長として九工大側を引き継いだのだった。

九大センターの受入れ体勢も整い、メーカーによるテストもOKになって正式に運用を開始したのは昭和48年4月23日で、当時の機器構成は図1に示すようなものであった。

その後、九大センターのマシンはF230-75からM-190を経て現在のM-200に移り、更新の度毎にリモートステーションの取扱いに関して検討と協議を重ねていただき、Mへの移行に際して待望のオンラインが実現した。

九工大に昭和48年、情報処理教育センターが設置されたのを機会に、従来の計算機室は情報処理施設へ改組され、教育センターと一体運営をすることになった。私自身は情報工学科へ移り、九大センターの御世話になることは希になった。

九工大の小形機が二度目の更新期を迎えているいま、情報処理施設の方で回線容量の増加を検討中と聞き、リモートステーション開設のため御援助いただいた当時のセンター長、次長、研究開発部長をはじめとする九大センターの皆様への感謝の念を新たにするとともに、九大センターと九工大を結ぶパイプがますます太く強くなっていくことを、また、これがモデルケースとして他大学にも広まり、大型センターのより効果的な利用形態へと発展して行くことを祈って筆を措く。

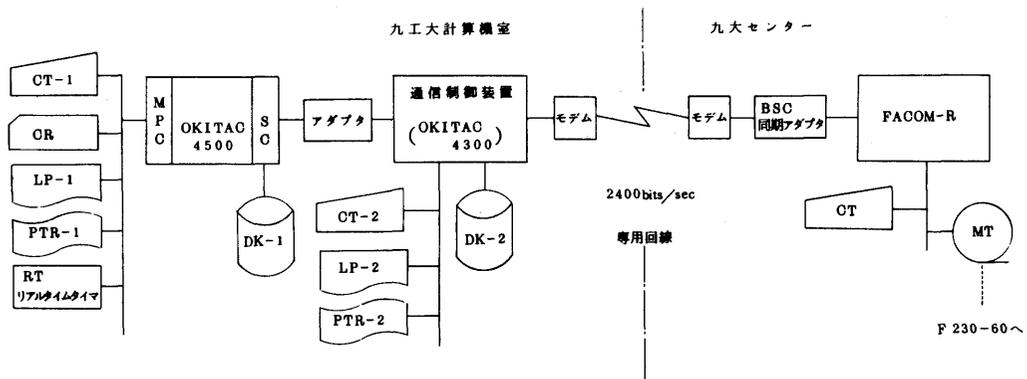


図1 昭和48年4月現在のシステム